

ニューアートヒストリーと、 その後

『ジェンダーと美学 p.32, 文化ナショ
ナリズムと芸術 p.122, イコノロ
ジー p.130, ジェンダーと美術史
p.138, ジェンダー論と芸術(アート)
p.336, アール・ブリュットとアウト
サイダー・アート p.340

「ニューアートヒストリー」(以下 NAH と略記) は学義としては新たな美術史(学)を意味する。1980~90年代に流行した英語圏の用語だが、その背景にはフランスの構造主義に代表される知の刷新が与っている。すなわちソシユール派言語学、アルチュセール派マルクス主義、ラカン派精神分析という理論的な「三種の神器」が周囲に与えた影響は無視できまい。人類学の C. レヴィ=ストロース、記号学の R. バルトに『言葉と物』の M. フーコーといった通称「構造主義三羽鳥」の英語圏での受容に伴う知の変動が、旧来の実証美術史学からの脱皮を促した。社会科学高等学院に属した H. ダミッシュや L. マランらもこの潮流に掉さすが、彼らは自ら NAH を標榜することはない。フランスではこれらの諸傾向は収斂せず、一時隆盛をみた U. エーコらの記号学や詩学も 1980年代には急速に退潮した。これとは裏腹に、英語圏ではこれら最新の理論や方法論を美術史研究に活用する傾向が顕著となる。『語と像』『視像と絵画』の N. プライソンが典型であり、J. バージャーの『イメージ』が NAH の先駆と事後的に認知される。

では何が「新しかった」のか。従来の財産目録作成、その延長の作品論/作家論さらには図像解釈学の枠組みを超える多様な方法論の適用。その結果として、知覚、認識、修辞、制度、権力、価値などの議論との交錯の裡に創作やその社会的機能、さらには社会変革の契機すら浮上させる読解の斬新さ、を指摘できよう。

●**具体的達成** だが NAH に属するとみなされた研究者たちは、単一の学統をなすわけではない。ルネサンス社会史を刷新した M. バクサンドール、オランダの知的世界の変貌と出版金融業との連鎖を仮定した S. アルパース、G. クールベ周辺の 19 世紀フランス写実主義と政治思想との社会史的洗い直しから出発した T. J. クラーク、60年代に美術批評家として頭角を現していた M. フリードのほか、フェミニズム確立に貢献した G. ポロックやオランダの M. パルなどの面々も一時は NAH の枠で括られた。さらに制度論と趣味判断の社会学を提唱した P. ブルデューの『芸術の規則』の周辺も、従来の講壇美術史に対する異議申し立てにおいて NAH との親近性を標榜した。だが知的流行の季節を過ぎると NAH は一挙に求心力を失い、1980年代には先端的な方法論はジェンダー論、視覚論、表象論ほかの問題意識へと分岐を遂げる。また世界的なバブル経済が終焉すると、学界も、扱う時代と文化圏を限定する保守性への回帰傾向が顕著となる。

回顧的に展望するならば、NAH とはグレコ・ロマンに遡る欧州の美術史構想がなお普遍的に通用した時代の最末期に発生した知的現象だった。冷戦体制の崩壊以降、第三世界から大量の移民が欧米大都市に移住を開始した。世界の金融的

一元化を模範とする経済のグローバル化、イスラーム圏の世界的拡大とアジアの相対的台頭とともに、欧米中心の文化的価値観は急速に揺らぎ、昨日の規範の有効性が疑問に付される。非西欧世界を包含した世界美術史構想が次の課題となる一方、経済史・交易史を中心に、過去 500 年の世界史を抜本的に再考する作業も日程表にのぼる。人類学的視点からの物質文化の読み直し、宗教的信仰と造形との関わりの問い直し。これらの課題は、NAH が知的な基盤としてきた欧米の学術的教養という共通財産そのものの崩壊・破綻とも裏腹な事態である。

NAH は 1960 年代まで支配的だったモダニズム史観への反措定として有効性を発揮した。学術方法論からみれば、H. ダミッシュの透視図法論は P. フランカステル『絵画と社会』への反駁、J. クレーリーの視覚機械論は E. H. ゴンブリッチの芸術心理学の塗り替え、G. デイディ=ユベルマンの刻印論はパノフスキーの文献学的図像学の掘り崩しである。H. プレーデカンブや J.-C. レーベンシュティン、田中純らによる A. ヴァールブルク復権の機運は著しいが、これは近代主義的美術史学が抑圧した闇の再浮上に寄与している。そうした動向の近傍に位置した芸術社会学の側から制度論的にみれば、D. ガンボーニのルドン批評研究、N. エニックのファン・ゴッホの人間学的研究、稲賀繁美のマネ受容史研究など、いずれもモダニズムの規範形成の背後に潜む神話を暴露し解体する企てだった。

●**極東との関係** 翻って日本をみると、NAH との同時代現象を観察できる。NAH 概念を導入した先導者としては英文学者・高山宏の功績は無視できまい。仏文学者・松浦寿輝のエッフェル塔表象論も、同時代の顕著な成果として記憶される。直接の影響ではないが、北澤憲昭、佐藤道信、木下直之らの明治美術史研究は、制度としての近代を意識化し可視化する仕事であった。辻成史や岡田温司らの聖像論は H. ベルティングらの企ての傍らで、聖性の顕現という奇跡に探測を降ろす。東京大学駒場に発足した学科に因む学術誌『表象』は、欧米で先行して創設された主要理論誌群と斬り結ぶ場が日本で活性化されている証だろう。

●**その後** とはいえ表象文化論・視覚芸術論の急速な発展は、美術史学という枠組みの耐用年限を疑問視する。さらに現代美術市場と美術行政の現場は、旧来の美術史学の業界とは乖離した展開を見せ始めており、美術史学そのものが近代以前限定の学問領域へと閉塞する傾向も否めない。NAH は研究教育の場で制度化されると裏腹に時代から置き去りにされ、過去の孤立した記憶へと隔離された。オランダ史家として出発した『風景と記憶』の著者 S. シャーマが BBC の「文明」シリーズに抜擢され、今や K. クラーク卿の衣鉢を継ぐ位置についている。それは NAH の達成なのか、それとも金融資本による世界篡奪の犠牲なのか。ドイツ語圏の図像科学と NAH の末裔との分岐は何を意味するのか。そして B. グロイスの説く電子媒体への移譲は、「文明の未来」に何を齎すのか。

[稲賀繁美]

オリエンタリズムと美術 ——西洋は東洋をどう見たのか

美的カテゴリー p.110, グローバル・アート・ヒストリー p.234, 日本美術誕生 p.240, ジェンダー論と芸術 p.336

オリエンタリズムとは西洋社会が「東洋 (Orient)」と規定した社会や地域に注いだ眼差しにつけられた名辞である。狭くは18世紀末、ナポレオンのエジプト遠征に伴う戦利品の到来や現地踏査の映像記録などに端を発する。だが18世紀後半以来、「東方」の社会風俗が欧州に大量に流入するとともに、モンテスキューの『ペルシア人の手紙』やJ.ラシーヌの悲劇『バジャゼ』他の舞台として、東方出身者や東方風俗は頻繁に話題となった。その背景にはレヴァント貿易さらには当時の世界交易の実相が控えている。東方風俗はオスマントルコの後宮への関心から、聖書の故地パレスティナへの巡礼、古代エジプト文明の発見にわたる地域・時代の広がり内包する。同じ一神教を奉じながらキリスト教側が敵視したイスラーム世界との異文化交渉がそこには初期条件として織り込まれていた。

フランス新古典派のA.J.グロなどはパリに居ながらにしてナポレオン遠征の歴史画を制作したが、次世代ロマン派のE.ドラクロワは七月王政のモロッコ侵出に伴い現地を訪問している。その間の世代に属するJ.-A.-D.アングルは旅行記をもとにトルコの浴場風物を描いたが、19世紀後半で画壇の大御所となるJ.-L.ジェロームなどになると、頻繁な東方旅行より持ち帰った文物に基づき、まことしやかな中東の「写実的」風物を、絵物語仕立てで量産する。作家G.フローベールとともにヌビアにまで足を伸ばしたM.デュカン^{ひょうそく}は現地で写真撮影を敢行し、遠隔地の観光写真に先鞭をつける。1860年代のスエズ運河開削は同時代の万国博覧会の盛行と平仄を合わせ、英国でもH.ハントやE.リアらの聖地巡礼が水彩画の盛行を呼ぶ。こうして東方風物や異国風景はサロンなどの展覧会における定番に昇格する。

●帝国主義の進捗と世界認識の拡大 ドラクローの《キオス島の虐殺》(1824)はギリシャ独立運動に取材し、《サルダナパールの死》(1827~28)は古代オリエンを舞台とした空想画、また《十字軍のコンスタンチノーブル占領》(1841)も現地の地形図を踏まえた歴史画の体裁である。想像力と未知の世界への好奇心との合体は、西欧による世界制覇の道行きやその正当化の術策と手を取り合っている。その一つの頂点をなすのがヴェルサイユ宮殿の戦争の間を飾るH.ヴェルネの通称《スマラ》(1845)。モロッコの現地抵抗勢力の象徴だった英雄A.カーデルの捕縛を描く全長28mに及ぶ大壁画は公式絵画と政治権力との結託の証である。これらオリエンタリズム絵画は、西欧世界による世界併呑の先端へと領土を拡大してゆき、大英帝国がインドを領有する傍ら中国沿岸にも触手を伸ばす。ジェロームはナポレオン三世の謁見したシャム外交使節を描いたが、早晩その延

長上に極東の日本も登場する。香港や長崎さらには横浜で生産された欧米滞在者のお土産としての画像や写真も、オリエンタリズム絵画の一変種といえよう。

一般に西欧による東方表象では、中東の熱帯乾燥地帯を光溢れ原色豊かに描きつつも、素描の筆法や構図の組み立てに関しては、あくまで欧州の美術アカデミーの規矩に則った絵画文法が尊重された。ところがその延長上の日本趣味(Japonisme)となると、様相が一変する。すなわち極東の錦絵の彩色や特異な構図という異国の美学を取り込み、欧米の絵画表象の慣習を打破する契機とする姿勢が顕著となる。これはその先、20世紀初頭以来の、通称「未開主義(primitivism)」へと展開する。そこには西欧の物質文明が物理的な世界制覇を完遂した時点で、未知の精神的な糧を非西欧に求める傾向とも無縁ではない。V.ファン・ゴッホの幻想の日本やP.ゴーギャンのタヒチ逃避も、「東方への憧れ」の究極に現れる現象として、世界史的な視野から解読されよう。日本滞在後南洋にも取材したJ.ラファージや、マルティニックで口承伝承を採取した後に来日して帰化したL.ハーンこと小泉八雲もこれらの同胞であった。同時代にはE.ディネのようにイスラームに改宗しサハラに定住した画家も知られる。「東方認識」は自己変容の契機でもある。

●イデオロギー批判 オリエンタリズムという語彙はE.W.サイードの同名の著作(1978)により、新たな知的次元を付与された。西欧による領土的収奪は知識の次元でも相同の篡奪をなしてきた。オリエンタリズムとはまた、西欧が非西欧社会を知識として収奪することを正当化する学術分野の名称でもあったからだ。そうした隠された政治的现实への非西欧側からの糾弾が、北米の知の中核において表明されるに至った。それは旧植民地出身の知識人が欧米の学会で市民権を獲得する趨勢・時代相とも表裏をなす。中東出身のサイードの同僚でもあったベンガル出身のG.C.スピヴァックは、そうした西欧圏在住の非西欧出身知識人が、被抑圧者を代行するという自らの位置に着目し、出自や性差に由来するかかる特権性を代価に発揮しうる批判的権能を自覚的に実践することには、教育的な価値があると訴える。今日では学問の「政治的正しさ」の模範と目される脱植民地主義理論は、東洋学の学術的批判のうえに咲いた仇花だったのか否か。その趨勢は現時点でなお見極め難い。だが世界大の植民地主義破綻の帰趨として、金融一元化の蔭で、非欧米出身者が旧植民地宗主国の学知や権力の中核を掌握し、世界文化はもはや従来の国民国家体制の規律では統御不能な動態を呈している。

[稲賀繁美]

□ さらに詳しく知るための文献

- [1] マッケンジー, J.M., 1995, 『大英帝国のオリエンタリズム』平田雅博訳, ミネルヴァ書房, 2001.
- [2] ミシュラ, P., 2012, 『アジア再興』園部 哲訳, 白水社, 2014.
- [3] ダバシ, H., 2009, 『ポスト・オリエンタリズム』早尾貴紀ほか訳, 作品社, 2017.

美学の事典

令和 2 年 12 月 25 日 発 行

編 者 美 学 会

発行者 池 田 和 博

発行所 丸善出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町二丁目17番

編集：電話 (03)3512-3264 / FAX (03)3512-3272

営業：電話 (03)3512-3256 / FAX (03)3512-3270

<https://www.maruzen-publishing.co.jp>

© The Japanese Society for Aesthetics, 2020

組版印刷・三美印刷株式会社 / 製本・株式会社 星共社

ISBN 978-4-621-30542-3 C 3570

Printed in Japan

JCOPY (一社)出版者著作権管理機構 委託出版物)

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(一社)出版者著作権管理機構(電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。